

## 幸福度という指標はどこまで有効か

経済学で「幸福度」という指標が注目を集めている。

主観的であいまいとされてきたが、意外に客観的な指標との間に相関があるという。

### 大竹文雄 氏

大阪大学

社会経済研究所 教授

# 報酬にしても、従業員の気持ちに応える 金額や渡し方、表彰や感謝のあり方といったものがあるように思います。

### 意外に使える指標だとわかってきた

—— これまで、経済政策の運営目標といえば、国内総生産（GDP）の成長率、失業率、インフレ率といった客観的指標が多かったと思います。主観的な幸福度という指標がなぜ注目されるようになってきたのでしょうか。

大竹 幸福度というテーマは、もともと経済学にとってはなじみのテーマです。なぜなら経済学そのものが、世の中全体の満足度を高めるためにどのような仕組みをつくれればいいのかということを研究課題にしている学問だからです。けれども幸福度を直接扱うということはしてきませんでした。それは、幸福をどの程度感じるかは人によって随分違うものだと考えられていたからです。

そのため、伝統的な経済学ではGDPのような客観的な指標を使ってきた。しかし、GDPで測れることは、人間の幸福感のほんのわずかと経済学者も知っていて、ある意味我慢をして使っていたのです。

1990年代に入って、主観的幸福度を経済学的に分析してみようという研究が始まった。調べてみると、「どのくらい幸福ですか」と聞くだけの非常に「いい加減な」指標であるにも

かわらず、ある程度信頼がおけるということがわかってきたのです。具体的には、所得、仕事の有無、年齢、性など人々の客観的な属性と、主観的な幸福度との間に、ある程度相関があることが明らかになってきたのです。そこで最近、経済政策の政策目標として、幸福度という主観的な指標を、GDPのような客観的な指標とともに使ってもよいのではないかと有力経済学者が考えるようになってきたのです。

### 経済的豊かさと幸福度との関係

—— GDPや所得水準といった物質的豊かさを示す指標と、幸福度との間にはどのような関係があると考えられているのでしょうか。

大竹 ある一定の所得水準までは、所得が高まるほど幸福度が高まるという正の相関が見て取れます。ただ、所得水準がある程度の高さまでくると、幸福度は頭打ちとなり、別の要素が幸福度に影響を及ぼすようになります。

所得水準が上げれば上がるほど幸福度が増すのなら、日本人は経済成長の結果、もっと幸福になったはずですが。しかし、日本の幸福度の長期統計をみると、所得水準が長期的に上昇しているにもかかわらず、日本人の平均的な幸

福度は上昇していません。欧米でも、こうした傾向がみられます。そこで、さまざまな仮説と実証が試みられてきました。

最近の研究で、ある程度の所得水準までいくと、“周りの人より良いか悪いか”ということが影響を及ぼすことがわかってきました。自分の所得が上がった場合、それはそれで幸福度は増しますが、自分とみんなが同じように上がって相対所得が変わらないときは、さほど幸福とは言えないらしいのです。また、幸福感、不幸福感には“慣れ”というものがあり、ある出来事によって「幸福だ」と思っても、4日程度しか持続しないといたことが次第に明らかになってきています。

### 客観・主観の両面から測定を

—— やがては幸福度という指標で経済政策を決定する時代がやってくるのでしょうか。  
大竹 幸福度だけで政策目標を決定することにはならないでしょう。幸福度だけを指標に経済政策を行おうとすると、うまくいかない面が多々あるからです。たとえば若者は低所得であっても幸福度が高くなる傾向があります。逆に高齢者は所得が高くても幸福度が低くなる傾向があります。幸福度だけを指標にすると、貧しい若者から豊かな高齢者への富の移動を行うべきという奇妙なことが起きてきます。

とはいえ、GDP統計が私たちの生活のすべてを取り出した指標とも思えません。今後の経済政策では、従来からの客観的な指標と、主観的な幸福度指標の両方をうまく活用することが重要ではないかと思っています

### 従業員の主観も大事な経営指標

—— 最近企業でも「従業員満足度調査」



を行うなど、従業員の主観的な「思い」を経営に生かそうという動きがあります。

大竹 ある意味で人間の心理にかなった動きだと思います。報酬にしても、単に賃金という金額だけで考えるのではなく、従業員の気持ちを考慮した金額や渡し方、表彰や感謝のあり方、処遇、環境づくりといったものがあるように思います。お金も大事ですが、たいていの人はお金だけでなく、やりがいのある仕事をして、魅力的な商品を作って売って、会社を誇りに思いたいと思っています。そうした従業員の「思い」に応える経営ができるとしたら、それは魅力的な経営者だと思います。

—— ありがとうございます。

聞き手／本合暁詩（組織行動研究所主任研究員）

#### おおたけ・ふみお氏プロフィール

1983年京都大学経済学部卒業。85年大阪大学大学院経済学科博士前期課程修了。大阪大学経済学部助手、大阪府立大学講師を経て、現職。著書『日本の不平等』（日本経済新聞社）、『格差と希望』（筑摩書房）、『競争と公平感』（中公新書）など多数。